

## 酒米「山田錦」の特性を発揮する安定栽培技術

- ・ 酒米「山田錦」の収量420kg/10a、外観品質 1 等を確保するための栽培法を明らかにした。
- ・ 平坦部における移植適期は 6 月10日前後である。
- ・ 追肥は減数分裂期の葉色をあまり淡化させないように配慮して、中間追肥や穂肥の施用量を決定する。

### 成果の内容

- 1 移植期を 6 月 23 日まで遅らせると収量や整粒歩合が低下することから、平坦部における移植適期の目安は 6 月 9 日頃である（図 1）。
- 2 基肥が幼穂形成期以降の生育や収量に及ぼす効果は小さい（表 1）が、中山間地等で初期分けつの確保が難しい場合には基肥窒素を 2～3 kg/10a 程度施用する。最高分けつ期の茎数の目安は 410～450 本/m<sup>2</sup>である。
- 3 減数分裂期の葉色が低下すると、心白粒の発現の悪化や千粒重が軽くなることがある。m<sup>2</sup>当たり籾数を確保するためにも 1 回目の穂肥は出穂 20 日前までに窒素成分で 2 kg/10a を基準に施用する（表 2）。
- 4 穂肥 1 回目の施用量は幼穂形成期に SPAD 値で 31 を下回る場合には増量する。茎数が 440 本/m<sup>2</sup>または SPAD の値が 39 を超える場合には穂肥を施用しない（図 2）。

### 成果の活用面・利用上の留意事項

- 1 「山田錦」の品種特性や酒造適性の向上を踏まえた栽培基準や生育診断技術、経営判断指標を盛り込んだ「酒米栽培マニュアル」を令和元年度に作成する。
- 2 「酒米栽培マニュアル」は地域特性に応じた栽培法を行うための地域版の栽培暦の作成に活用できる。
- 3 穂肥施用のための生育の目安については、今後もデータを追加して精度を高める。

### 具体的なデータ

表 1 「山田錦」の移植時期と晩植における穂肥施用法が生育、収量および収量構成要素に及ぼす影響

移植期	穂肥N		幼穂形成期		倒伏 0-5	穂数 本/m <sup>2</sup>	収量		登熟 歩合 %	整粒 歩合 %	玄米 タンパク 含有率 %
	施用量 kg/10a	茎数 本/m <sup>2</sup>	SPAD 値	2.0mm kg/10a			比率 %				
6月9日植	2-2	416	35.0	1.5	322	506	114	75.9	70	7.8	
	2-0	476	37.7	2.0	337	445	100	64.6	50	7.8	
6月23日植	2-2	490	38.3	2.0	343	445	<u>100</u>	66.4	49	8.4	

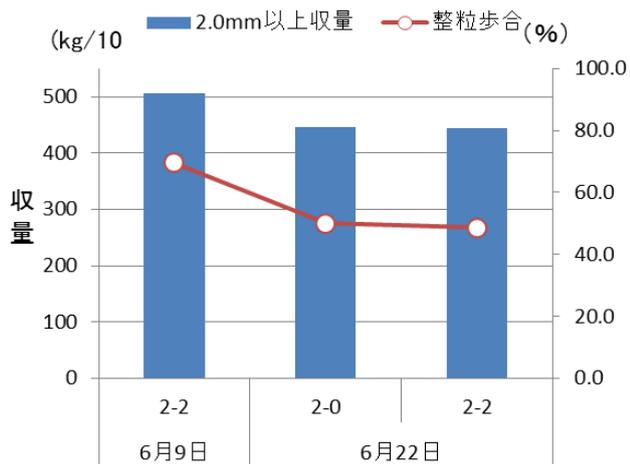


図1 移植期、穂肥施用と収量、整粒歩合の関係

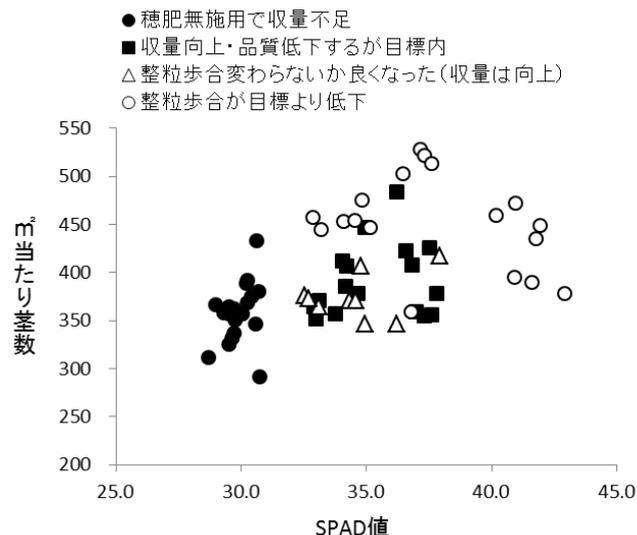


図2 幼穂形成期の生育と穂肥施用による目標とする収量・品質の達成との関係

表2 「山田錦」の穂肥施用量法が生育、収量および収量構成要素に及ぼす影響

試験年次	ほ場地力	穂肥N	減数	収量	千粒重	m <sup>2</sup> あたり	心白
		施用量 kg/10a	分裂期 SPAD値	2.0mm kg/10a	g	籾数 (×100)	発現率 %
平成28年	低地力	0-0	29.4	370	27.4	170	57.3
		2-0	33.9	439	28.1	194	63.8
	地力中庸	0-0	28.7	359	27.3	185	58.4
		2-0	34.1	420	28.0	209	65.8
	高地力	0-2	32.1	460	27.6	252	51.4
		2-0	35.9	498	27.8	255	61.5
平成29年	地力中庸	0-0	31.3	448	27.5	187	55.6
		2-0	37.3	494	28.0	211	61.4
	高地力	0-0	32.2	448	28.4	173	62.7
		2-0	36.1	507	28.8	200	63.2

6月9日植えの調査結果である。SPAD値はミノルタ社製の葉緑素計SPAD-501で完全展開第2葉を測定した。

関連文献等

なし

研究年度	平成27年～30年
研究課題名	より良い日本酒づくりのためのICTを活用した酒米の栽培管理支援システムの確立
担 当	農業技術部土地利用作物研究室 前岡庸介、金子和彦、陣内暉久、中野邦夫(現農業担い手支援部)、池尻明彦(現 山口農林水産事務所)、 農業技術部資源循環研究室 有吉真知子、中島勘太(現 農業技術部柑きつ振興センター)